

次のステージに立つ「地域」

地域雑誌「谷中・根津・千駄木」が昨年8月、94号で終刊となった。まちの歴史や文化を掘り起こしながら、谷根千という地域のコミュニティを見つめ直し、地域そのものの社会的な価値を20年以上も世に問うてきた。乱開発反対や建物保存の先頭にも立った。今、全国各地でそれぞれの価値の掘り起こしが行われ、新たな地域づくりへのステージが生まれようとしている。谷根千の活動に一つの区切りをつけ、東北の小さな町で畑づくりも始めた森まゆみさんに、改めてこれまでの取り組みを聞いてみた。

地域には宇宙がある

西村●谷根千のスタートは？

森●わたしは、79年に結婚したんですね。子供が産まれて、その子を抱いてまちを歩いたら、意外に面白いんです。それは中学3年生の時、朝倉彫塑館を見つけ、大学時代にそこでアルバイトして、それが伏線となって谷中に興味を持つようになっていった。谷中、根津、千駄木の中でも、自分の興味の中心は、谷中だったと思いますね。お墓が好きだから、お墓の調査なんかしていた。

そうしているうちに、どんどんま

ちが消えていってしまう。小説を書

いても、写真集をつくってもよかつたんですけど、まちの様子を残したいと思って。だから、『谷中スケッチブック』（ちくま文庫）を書いたのが最初。これを執筆していくうちに仲間ができて、1冊本を出しただけで終わっちゃうんじゃないかって、ま

ちの古いものを残すシステムか、みんなと楽しく暮らす仕組みができたかなと思っていたら、それに山崎（範子）さんが反応してくれて、妹（仰木ひろみ）につながったから、

3人で地域雑誌を始めたんですね。

西村●面白いのは、森さんは文学少女のようなところがあって、鷗外や一葉のような作家に取り組んでいる面があると思うんですけど、他方で地域にも関心を持って、活動の場を広げている部分があるじゃないですか。

森●わたしは「文学・芸術は高校まででいいや」という感じだったから、大学は文学部ではなくて政治経済学部だったんですね。狭い私小説的な世界はイヤになっていたから、もうちょっと社会を動かしているもの

に興味があった。でも革命のような少数の人々が一挙に社会を変えちゃうようなやり方じゃあなくて、皆が少しずつ地域から変えていくようなやり方がいいんじゃないかと思ってね。

地域には改善してもらいたいことがいっぱいあるわけですよ。例えば、学校の入学式でも、なぜ来賓は前列にいて父兄は後ろの席にいないといけないのか、といったくだらないことも含めて、日本の形式主義、権威主義が存在するでしょ。そういうのじゃない地域をつくりたいなともったんです。

西村●世界全体を変えていくことと、今、森さんが言ったように身近な地域を改善するという二つのことがありますね。

●森まゆみ氏
1954年東京都文京区動坂に生まれる。早稲田大学政経学部卒業、東京大学新聞研究所修了。出版社で企画、編集の仕事にたずさわった後、フリーに。地域雑誌「谷中・根津・千駄木」の編集人。



森●そうそう、地域には無尽蔵な宝が埋まっているのに、全く表面に出きてないから、足元を掘り起こすことから始めたんです。私たちはお金がなかったし、子供がいることで地域に縛り付けられて遠くにいけないでしたしね。

西村●女性が子供を育てながら、いろんなことをやる社会環境は日本にほとんどないでしょ。

森●だけど、地域雑誌を始めたなら、地元宇宙があり、汲めども尽きせぬ泉があったね、私は29歳で『谷中・根津・千駄木』を創刊しましたが、43歳になって海外に行くまで、20年間パスポート持ってなかった。海外旅行より自分の住んでいるまちの方が面白いのね。どこかの名所旧跡を見に行くより、地域のおばあちゃんの話を聞く方がはるかに豊穡でしたね。

地域を掘り起こす

西村●その頃、僕たちも地域調査にのめり込んで、動態保存とか、様々な新しいアイデアが生まれてきてね。

森●ちょうど同世代ですよ。最初お会いしたのは、私が谷根千を始めた頃で、西村さんはセーター着たお兄さん。先生という感じじゃなかったですね。

西村●まだ、助手でした。

森●谷根千の3号を持って行ったら、森さんたちのやっていることは面白いと言ってくれて、大変励みになりました。

西村●地域を掘り起こすことには、地域全体の生活史を見ることが個人史を掘り起こすことがあって、双方のバランスをとる必要があるですよ。谷根千には、両方がバランスよく盛り込まれていました。そもそも地域雑誌というのは、森さんが言い出したことですよ。

森●あの頃はタウン誌と言われていたから、「タウン」というのが、浅薄で嫌でした。

西村●PR誌と全く違う発想でやらないと、掘り下げられませんね。

森●お金儲けのために出してくる情報には皆飽きていて、雑誌や新聞に同じようなことが取り上げられるのにも飽きていて、それに近づくこと

を知りたいという欲求が皆にあつた。身銭を切って、住民の目線で、他のメディアに載っていないことだけを掲載したんです。逆に『谷中・根津・千駄木』に載せたことが他のメディアに取り上げられたことはあります。

西村●自ら様々なネットワークを築き上げるパーソナリティの人じゃないと難しいですね。
森●聞き書きをするのに、赤ん坊を連れて行ったから、赤ん坊が地域と私たちのメディアになったわね。
西村●同じ地域の中で、こんなに長い間続いた理由は、調べていくと色々なものがあつたということですか？

森●そうですね、芋づる式に宿題が増えちゃったから、話を聞くうちに色々なテーマができてきたから。
西村●雑誌のポリリウムが限られてるから、編集が大変だった？

森●最初は専念してやっていただけ、聞き書きの量が半端じゃないの。それを32頁に編集しなければならなかったから、最初の20号までは、今見ても良い出来だったと思います

よ。
西村●内容が凝縮されてね。

森●そのうちしがらみが増えてくるんですね。今思えば、私たち買物難民のお年寄りのお使いや宅配までやってたから、介護事務所みたいでした。山崎さんなんて、雪掻きまでやってた。取材で話を聞いたお年寄りから頼まれると断れない。お店の広告チラシのためにキャッチフレーズを考えたり、お見舞いやお葬式なども、どんどん増えていきました。

3人の誰が着てもいいように、フリーサイズの喪服も買って、付き合のある人の葬儀には、全部出るようにしていました。香典がわりに、故人の掲載された号を何十冊か持参して式場で配って喜ばれましたよ。近影がないというので、遺影に使われた取材写真もあります。新聞記者が感心するほど、地域と濃密な関係が形成されるようになりました。

適的方法で地域を読む

西村●全国の他地域でも、それぞれの地域が深堀をしていけば、それなりの地域雑誌が出来るんじゃない

すか？

森●出来ると思います。

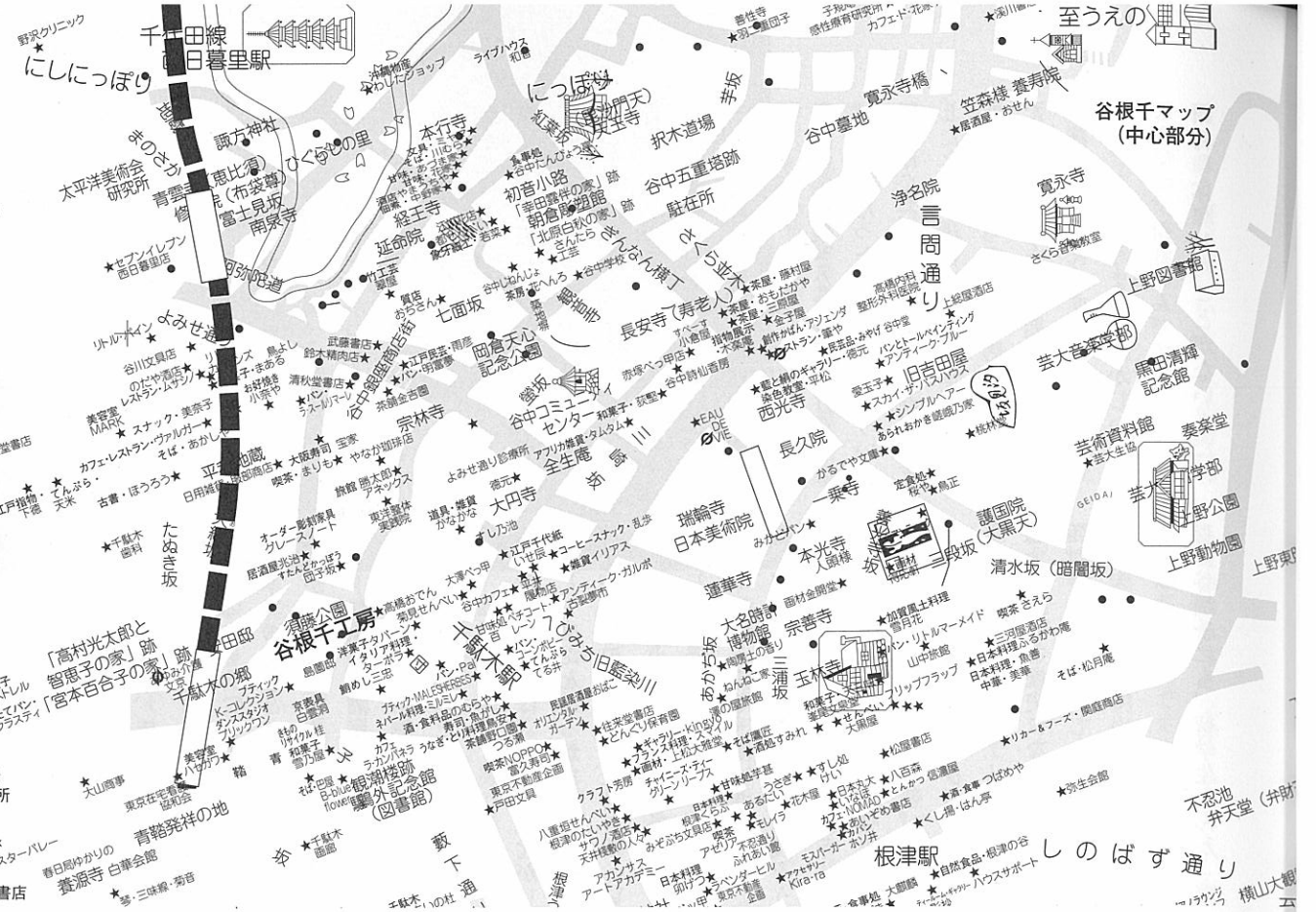
西村●僕らも各地を調査して、ある時は、昭和30年代の団地に入って調査してみると、歴史が浅いのでなにか分かるのかと問われるんだけど、そこにも生活があるし、団地も徐々に変わっていく有様が見られるんですね。人が住んでいる限りは、歴史があるしね。おもしろいものです。
森●古い歴史を持ったまちが日本にたくさんある。町並みを調査する建築の専門家に言ったのは、何で聞取りだけ取って、生活そのものを調べないのかということ。調査には建築以外の歴史調査の研究者も来るけれど、縦割りで分かれちゃっているでしょ。宮本常一みたいに能登や五島列島で行った9学会連合の学際調査のような調査に私が関われば役に立つなと思いますね。
西村●確かに対象が同じでも、分析が分かれて、生活の全体像が見えない場合も多いですね。
森●大学の先生は、自分の得意なところに引き寄せて総論的な一般論を書くでしょ。地域の歴史でなくとも

良いような話ですよ。

西村●自分の所属する学会向けに書くような場合もありますし、地域の人々に読んでもらう内容になっていないですね。

森●その一方で、民間の郷土史家も物足りない。難しい古文書を解説するとか、やたら古いことばかりに特化したし、今の暮らしに繋がらないでしょ。私たちの方法は週り方式です。あなたの住んでいる場所は、以前は誰が住んでいて、その前はこんな人も住んでいたんですよ、と週り行った方が、みんなにへえって興味を持ってもらえるんですよ。

西村●地域の歴史を読む方法としての適的方法は大事ですね。現在に對する関心がないと、何が最初でということからだけで、始めることになりませんよ。
森●高校の歴史も古い方から順にやっているから、興味を持ってない。古代史からなっちゃうのね。
西村●歴史そのものが現代の微妙な問題は全部切り捨てているから、現在と切れているでしょ。特に、大きな変化が近代から現代には起こって



いるから、そこをどういうふうに見るかという、しっかりしたスタンスがないといけない。戦前については、どういう風に見るかという見方は定まっているけれども、現在の問題をどう見るかという立場をきちんとしておかなくてはならない。

森●さっきのことに少し付け加えると、八潮団地(品川)で、まち遊びということをやった人達がいたでしょ。「まちを遊ぶ——まち・イメージ・遊び心」(晩成書房)。子供達が訪ねると、同じ間取りでも開けてみると全然違う色彩だったり、においだったり、相違が出てくるという遊び方は、すごく面白い。やり方を工夫すれば、団地や新しいまちでも何か出来ると思いますけどね。

西村●そのような住まい方調査もあるし、オープンスペースのあり方、集会施設の使い方も、様々で面白いですよ。

まちの相場を守って

森●私は何が嫌かといえば、歴史や文化を破壊して、開発指向で上潮路線で行くのが嫌なのね。

西村●開発者側は場面が変れば政治的スタンスも変わって来るけど、こちらが場所を中心すれば、視点は変わらないよね。通りの生活の大事さから発想していけば、そんなにぶれないですよ。

森●まちにはまちの個性と歴史があるから、そういう場所をむやみにじるのは良くない。根津の横丁をつぶして、大ブロックの高層ビルをつくらうとする行政の動きもあつたんですよ。とんでもない話です。

西村●計画するとなると、突然、発想が変わる人がいますね。「つくるモード」になって。ただし、まちを歩いてそのスケール感が染み込んでいけば、建てる場合もあまり変なものにはならない。調査をしても、デザイン行為とは別だから、何の役にも立たないと言う人もいますが、直ぐには反映しなくとも、頭の中で化学反応が起きて、このくらいが許容限度じゃないかというスケールや中味に関するセンスが生まれて来ると思う。まちの持っている許容限度があると思うんだけど、図面だけを見ている人間にはそれが分からない。

森 ● まちの文脈を無視した開発が良くないことは、西村先生に教わった「相場崩し」という、良い言葉があるけど、まちの相場を崩してしまいうことなんだと思いますね。この地域の場合は、調べてみると一区画を同じ大工さんがつくって町並みに統一感を出している。その相場が崩れるのは、良くないと思いますね。

西村 ● これは飛騨古川で出会った言葉です。地方に行けば、変化がずつと緩やかだから、自ずとその相場を共有していると言えますね。

森 ● かといってね、若い人達の間でレトロが流行って来ているけど、レトロに甘い。谷根千の初期は、岡本邸、朝倉邸、平櫛邸、安田邸など立派な住宅を残さなければいけないという考えだったんですよ。そういう建築は公共的な形で大分保存できましたよね。最初は大人が歩いて気持ちの良いまちで、年配の人が多かったんですが、ある時期から若い人達が増えて来たんです。若い人達にとって、こういうまちは懐かしいんじゃないって、新鮮なんですよ。

西村 ● 体験したことがないんだけど、懐かしいような新鮮さ、ヒューマンスケール感、手触り感への選好なんだろうけど、それに傾斜すると甘くなるということですか？

森 ● 本町の町家とフェイクの町家の区別がつかないのね。新建材を使ったレトロ風の居酒屋なんて行って感激したりして。本物を見る目をもつと養って欲しいと思うんですけどね。

西村 ● これまでは、団塊の世代がリードして来たところがあって、その世代が現役の頃は競争社会で新しいものを開発していった。彼らがリタエアして開発の世論もトーンダウンして来ているんじゃないか？

森 ● だから、立派な屋敷のみ残そうというんじゃないって、昭和30年代までも含めて、維持したい、住みたいと言う人が多くなっている。

西村 ● 映画『三丁目の夕日』のような世界にね。

森 ● 昭和まで歴史になっちゃった。西村 ● あの頃は貧しかったけど、明るい未来を信じていた時代へのノスタルジー。

森 ● 谷根千にも、留学生なんか、蔵

の家や武家屋敷に住みたいという希望だったのが、そのうちに木賃アパートに住みたいというふうに変わってきた。家は貧しくとも、まちは良いから住むのが楽しい。まちの楽しみが保障されていけば、住まいは古いアパートでもかまわない。

西村 ● 生活の部分がまちの中に出ていって考えればね。そう思えるまちかどうかで変わってきますね。神楽坂のようところは、はじけ過ぎている気もするけど、よくやっている。

森 ● 神楽坂はね……

西村 ● いま、まちが好きだという人達が増えて来ているでしょ。そのよくなまちがパッチワークのように増えて行けば良い。けれど、そうじゃないまちが、これからどう元気をだしてもらうかがこれからの課題ですね。

森 ● ひとつの場所にのみ人が集まるのも変だしね。あるとき、松山巖さんが訪ねて来て、この辺の呑み屋が休みなもんだから諏訪神社の向こう(荒川区側)に行つたのよ。そしてらガラッと雰囲気が変わるのに驚いていた。ちよつと行くと、色んな間

西村 ● 地域が次のステージに行っているという感じかな。なるほどね。地域の掘り起こしが地域づくりの出発点になるんだということですね。

森 ● 一過性の思い付きでイベントやつても長続きしないわけで、イベントをやる場合でも、必然性のないことはやっていない気がするの。色々な動きが起きるようになったのは、柏湯さんが廃業のため取り壊されることになって、銭湯の建物を活用して現代美術ギャラリー「スカイ・ザ・ハウス」がオープンした頃からかな？

森 ● この26年間、相当大事なものが喪われましたけど、谷根千を止めた今、一番誇りに思っているのは、次をやってくれる人達がこれだけいるっていうことなんです。

西村 ● 谷根千工場の活動によって地域がイメージを持てましたね。

森 ● いっぱう、谷根千歯科とか谷根千接骨院とか、谷根千の冠が付いたものも、いっぱいできました。私の知らないところで色んなことが動いていて、フォローは出来ていないですね。

西村 ● 地域が次のステージに行っているという感じかな。なるほどね。地域の掘り起こしが地域づくりの出発点になるんだということですね。

森 ● 一過性の思い付きでイベントやつても長続きしないわけで、イベントをやる場合でも、必然性のないことはやっていない気がするの。色々な動きが起きるようになったのは、柏湯さんが廃業のため取り壊されることになって、銭湯の建物を活用して現代美術ギャラリー「スカイ・ザ・ハウス」がオープンした頃からかな？

森 ● この26年間、相当大事なものが喪われましたけど、谷根千を止めた今、一番誇りに思っているのは、次をやってくれる人達がこれだけいるっていうことなんです。

西村 ● 谷根千工場の活動によって地域がイメージを持てましたね。

森 ● いっぱう、谷根千歯科とか谷根千接骨院とか、谷根千の冠が付いたものも、いっぱいできました。私の知らないところで色んなことが動いていて、フォローは出来ていないですね。

西村 ● 震災復興による区画整理によって東京のまちは変わってしまった部分も多いしね。

森 ● 東京の場合は戦災にあって個性のない、抽象的なグリッドのまちなっていている場合が多いし。焼けなかつたから、いい先輩が守ってくれるからと言って、独り勝ちにならない。

西村 ● 和風の居構えが評判になるなど、どこでも店一軒のレベルからヒューマンスケールを取り戻そうという動きが起きていると思うんですよ。

森 ● 谷根千の地域が評判になって、後追いで皆さん入って来ると、お店でも空き家の物件数が少ないんですよ。谷中銀座は空き店舗が一軒もない。そうかといって家賃は高い。谷中には見知らぬ金持ちに貸すよりは、気にいった人に安くという家主さんがいるんです。だから、自分のやりたい仕事をしながら住み続

が。
森 ● 聞いていると東京に来たら、この辺を歩きたいという。神楽坂も向島も行くでしょうけど、この辺を歩いて下町情緒を味わいたいという人が増えているんですね。私も由布院(大分)、七尾(能登)、鳥根といった地域と濃く付き合っているんです。鳥根は出雲の農民佐藤忠吉さんをどうしても書きたかった(『自主独立農民という仕事』バジリコ)。
西村 ● それはそういうところに光を当てるとどうですか？
森 ● 光を当てるというより、私たちの生存は農業にかかっているわけだから、子供が産まれた時から、食物にずっと興味があったし、農業の自給率が38%でしょう。日本の未来は危ないなと思っていて、農業や漁業について書くようになって、レパトリーが拡がりましたね。
西村 ● 丸森(宮城)で畑をつくられているけど、そういうこととつながっていますか？
森 ● つながっています。お互いに支え合えないとダメでしょ。
西村 ● 都市は農がないと生きていけ



●西村幸夫氏
東京大学都市工学部教授。福岡県福岡市生まれ。1996年、東京大学教授。

ないし、農村もこれからは都市的なものがないと生きていけないと思うんです。だから、双方が支え合うような仕組みをつくって行かなくてはならない。あるまちや人がどこかの地域を支える。その地域の人は都市的なものを楽しんでね。

森●由布院や七尾、鳥取の鹿野の人なんかも、そういう交流があります。もっと増えれば良いと思いますけどね。田舎と都会の関係は対立じゃなくて、都市の人達は田舎の現実をもっと知らないよね。

西村●田舎の自然は、そこに住んでいる人だけで責任をもつべきだと



ると、対応が限られるしね。

森●逆に今、里山で暮らしたいという若い人達が多くて、そういう人達がどうにか暮らせるシステムをつくれると良いですね。

西村●お金を使わないで暮らすにはどうすれば良いか。そのような暮らしの価値をちゃんと示すことが大事だと思っんですよ。

森●私たちなんか良い例で、ほとんどお金がなかったですからね。母子家庭の平均収入しかなかったのに、3人ちゃんと育ったんだもんね。壁にほしいものを書いて貼っておけば、誰かが持って来てくれました。一人は私が建物見学に連れ回したせいか宮大工になりました。

編集●市場経済システムだけじゃなくて、昔からあった互酬経済システムを地域社会の中に復活させれば良いのかもしれないね。

森●カナダのホーンビー島(Hornby Island)というところに行っただですよ。ヒッピーが移り住んでいるヒッピーアイランドのひとつで、島にはリサイクルが整っていて、まちの一番良い場所に不用品交換市

場が出来ている。下着や便器まで置いてあるんです。私も服をもらいました。谷中でも、子供のものは靴下や下着しか買ったことがない。

西村●それはソーシャルネットワークが出来ているからで、それを復活させれば良いんじゃないかな。日本でも、フリーマーケットは各地で開かれてるでしょ。

森●谷根千地域には、自転車の行商「ながしの乙女」があつて、手作りカバン、古本、菓子なんかを行商しているんですよ。別な人は、アクセサリーをつくっては自分の胸をショウウインドーにして売っている。江戸時代のポテフリヤ行商に近いものがあるよね。

西村●それはユートピア的ですが、他の地域でどのくらい可能性がありますか？

森●それは私たちも、時間をかけてやって来たことだから……。

西村●今は100カ所あるギャラリーも以前はゼロだったのを、地域めぐりができるようにつくって来たからですよ。森●最初はどこに何があるかも、わ

からなかったものね。

編集●森さんのネットワークだけでなく、地域相互のネットワークが広がると思いますけどね。

森●奥会津のからむし織を販売したら、お婆さんがしばらくじっと品定めをしてからたくさん買っていたり、生産地では高く売れないものも、良い物だここでは売れます。

西村●そのようなものづくりの販売ネットワークがまちにできるといいですね。

森●出水市(鹿児島)の藍染作家が販売場を出したり、大島紬も相当な売上げでしたよ。

西村●不特定多数の客ではなく、良い客を選んで、日本中にネットワークをつくり、ここで販売出来るような気がするね。谷根千が地域のメッセ会場になって応援してあげれば良いですね。

編集●本日は有り難うございました。

*終刊後は「谷根千ネット」に引き継がれている (<http://www.yanesen.net/>)